

●利用者13● 80代 女性【介護職員と看護職員の協働】

✓医療依存度の高い利用者に対し、看護職員が介護職員と一緒にケアを行い、介護職員の不安を解消。

✓家族の希望かなえられるよう、最期は自宅に移動しての看取り

1. 利用者の基本情報

世帯構成	娘（60代）				
介護力	主たる介護者はいない。主介護者には持病があり、常時の介護は困難。				
要介護度	要介護5				
障害高齢者の日常生活自立度	C2		認知症高齢者の日常生活自立度	III a	
ADL	移動	食事	排泄	入浴	着替え
	全介助	全介助	全介助	全介助	全介助
主な傷病	・アルツハイマー型認知症 ・間質性肺炎末期状態（在宅酸素使用）				
必要な医療処置	・看取り期のケア ・カテーテル（尿道留置カテーテル等） ・たんの吸引 ・ネブライザー ・酸素療法（酸素吸入） ・注射・点滴 ・創傷処置 ・服薬管理 ・疼痛の看護 ・摘便 ・リハビリテーション				
ターミナル期	ターミナル期である	病状の安定性・悪化の可能性		不安定・悪化の可能性あり	

2. 利用開始の経緯

<医療ニーズの高まりにより関連法人の小規模多機能型居宅介護より紹介>

- ・家族は、本人の状態として間質性肺炎の末期状態で、入退院を繰り返し、突然呼吸が止まってもおかしくない状況という説明を受けていた。また、主介護者の娘には持病があり、ショートステイを利用しながらの介護していた。
- ・皮膚トラブルがあり連日処置が必要なこと、バルーンカテーテルが入っていることなど、医療処置が増え、看護職員がいない日もある小規模多機能型居宅介護では対応が困難な状況となり、関連法人の小規模多機能型居宅介護事業所より紹介があった。

3. 利用開始直後のサービス提供状況

<医療依存度の高い利用者に対し、看護職員が介護職員と一緒にケアを行い、徐々に慣れるように支援>

- ・退院直後は、家族の希望で泊まりから開始した。泊まりの中で、皮膚トラブルへの対応等、医療依存度の高い利用者に対して、介護職員が不安に思う部分があったため、看護職員と一緒にケアを行うことで、徐々に慣れていけるようにした。
- ・皮膚状態が悪化しており、連日シャワーでの清潔保持を行い、皮膚疾患の改善に努めた。また、

2名体制で移乗などの介助を行った。皮膚が弱いため、移乗シートを使用してのケアを行った。

- ・自宅にいる間は、家族の負担軽減のため、訪問看護（同事業所：医療保険）と訪問介護の両方で訪問を行い、就寝前のケアは訪問看護（同事業所：医療保険）で対応した。

※利用開始から最初の2週間のサービス提供状況

	1日目	2日目	3日目	4日目	5日目	6日目	7日目	8日目	9日目	10日目	11日目	12日目	13日目	14日目
通い	○	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○
泊まり	●	●	●	●	●	●	●			●	●	●	●	●
訪問(介護)								□ 1回	□ 1回					
訪問看護 (同事業所: 医療保険)	★ 1回	★ 1回	★ 1回	★ 1回	★ 1回			★ 1回	★ 2回					

4. その後のサービス提供状況

<初めて看取りに対応する介護職員に対して、看取りへの覚悟ができるように支援>

- ・呼吸状態の悪化に伴い、看取り期に入っていったため、家族に対して説明を行い、基本的には看護小規模多機能型居宅介護を利用し、最期は出来れば自宅で看取りたいという思いを確認した。
- ・初めて看取りを経験するスタッフもいる中で、看取りの経過を書いたパンフレットを用いて、介護職員が看取りに対する覚悟ができるような時間を持った。
- ・家族の体調不良もあり、家族が泊まるという形で看護小規模多機能型居宅介護で過ごし、最期の日、呼吸が止まりそうな状況で家族を呼んで、その後、家族の希望で看護職員による付き添いの元、自宅へ帰り、自宅で息を引き取った。

※直近の2週間のサービス提供状況

	1日目	2日目	3日目	4日目	5日目	6日目	7日目	8日目	9日目	10日目	11日目	12日目	13日目	14日目
通い	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
泊まり	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
訪問(看護)	☆ 1回	☆ 1回	☆ 1回	☆ 1回	☆ 1回	☆ 1回								
訪問看護 (同事業所: 医療保険)							★ 3回	★ 3回	★ 3回	★ 3回	★ 3回	★ 3回	★ 3回	★ 1回

○サービス利用の効果

- ・利用者にとって、医療依存度は高くても、通いや泊まりを利用できることで、自宅に閉じこもる生活ではなく、社会参加が可能となり、他者との交流を図る機会を持つことができる。
また家族にとっては、そのような状況の利用者を家で看たいと思っけていても、家族だけでは看られないという思いがあるが、レスパイト機能があることで、施設入所の選択をせず、自宅に居続けられる。
- ・自宅と事業所の両方をみている看護職員がいることで、通いや泊まり中での様子を把握するこ

とができ、それが家族の安心につながっている。また、在宅で看取るか、事業所で看取るかの選択が可能で、看取りの場所のひとつになることができる。

- ・看護職員と介護職員が一緒の視点を持って看取りに向うことで、ケアワーカーの不安解消につながり、また看護職員自身もどのように伝えたら多職種に理解してもらえるかを考える機会にもなる。